慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「政治的正義」と「人口論」
Sub Title	
Author	津田, 誠一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.1 (1923. 1) ,p.80- 107
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19230101-0080

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

彼等の結婚に就いて Ada Earland は云ふ『其は双方の尊敬と愛情とに基いた結婚である。其の結婚生活は靜穩にして無事であつた。荒々しい言葉の喧嘩や苦々しい感情によつて亂される事はなかつた。夫の方の撰擇は平靜に、何等情熱に驅られる事なくして行はれた。若し妻の側により深い愛著があつたとしても彼女は其れを外部に現はす樣な女ではなかつた。』(Ruskin and his Circle p. 14.)

彼等の結婚の翌年一八一九年二月八日にその長子であり又獨り子であるジョン・ラスキンが生れた。

以下吾々はジョン・ラスキンの生涯を長く辿つて行かうと思ふ。(未完)

「政治的正義」と「人口論」

津田誠一

一

洵にダヂッド、ヒユームの所言の如くライン河は北流しローヌ河は南行すと雖、水の低きに趣くと云ふ原理は一である。其環境異るに從ひ其方向相反するも、兩者を律する法則に二致有るわけでは無い。正統派經濟學樹立前後大動搖の過渡期に於て、民心の歸嚮に簡明なる指針を與ふ可く現前せるは、功利主義哲學換言すれば最大多數の最大幸福を以て、道德の理想善惡の標準と觀る思想である。然るに當時等しく此功利の原理に立脚し乍ら、其人性觀に霄壤の杆格を存せる爲め、一は社會革命を高調し、他は現存制度を謳歌し、相背反せる兩極に走つて啻に相互の應酬に止まらず、其周圍に囂々たる論爭を捲起せるはWilliam Godwin と Thomas Malthus である。而して此兩者の葛藤は、取りも直さず現代に於て社會問題上相拮抗せる二傾向を代表せるものである。蓋し功利主義哲學は既に嚴正なる純理論的檢討を經て、倫理學上其根據を失墜せるも、尙最大多數の最大幸福なる觀念が政治的社會的理想として、依然現代に傳承せらるゝは明白である。然も前世紀に於る經濟事情の劃期的進展は、先にマルサス以來此功利の原理に依つて擁護せられて來た正統派經濟學を、今又ゴドヰンの思想を復活し同じ功利の原理に依つて、破綻に導く傾向を示唆するに至つた。

爰にマルサス「人口論」を圍る時人並に後人の論議の中に、這個の消息を看取せんとするのが本稿の趣意で有る。

固より人口過增の傾向を云爲して、地上に蟠蹠する一切諸惡の根蔕と思惟せるは、必ずしもマルサスに濫觴を發せるにあらず、既に彼れ自らが其「人口論」第二版の序言に於て數名の先哲を列擧し、明に先蹤の存在並に其啓示を承認してゐる。然るに彼等の文獻に關せず、人口法則が專らマルサスの名に於て記憶せらるゝ所以は奈邊に存する乎。

第一にマルサスの「人口論」は其論旨は暫く措き、其表現の態樣に於て遙に前人に冠絕してゐる。彼は先哲攻究の不備を論じて云ふ、「啻に人口增殖と食糧增加の比較に關して、何人も充分精細なる叙述を爲さぬのみならず、該問題中の最も微妙なる、且つ興味有る部分が全然閑却せらるゝか、或は極めて輕々に取扱はれてゐる。即ち人口が常に生存資料の水準に控制せらる可き事理は明白に演述し乍ら、此平均作用を惹起する各種の樣式に關しては、殆ど何等の研究も

爲されてゐない。又人口の原理が如何なる結果を生ずる乎。其社會に及ぼす實際的效果如何を、徹底的に追求せる者は未だ曾て皆無である。如上の諸點が即ち本著に於て、余の最も詳說せんと欲する所である」と。而して彼は大體的に這般の意圖に成功してゐる。換言すれば人口は生存資料に依據し、其增加は罪惡貧窮並に所謂道德的抑制に依つて制限せらるゝ所以を、前人に比し一層組織的に明確に、又徹底的に有效に表現せるものと云ふ事が出來る。

第二に、而して遙に重要なる原因は、マルサスの「人口論」が其出現當事の社會的背景に依り、僥倖せられし事である。蓋し佛蘭西大革命の狼烟が久しきに亘る因襲制度に虐げられし人々の魂を糾合して、權力階級に對し敢然挑戰の火蓋を切るや、抑壓擅恣の治下に忍從しつゝ緘默陰微の間に釀成せられたる自由、平等、博愛の精神は、一擧に白熱的火焰の勢威を以て全歐の人心を燃了し、王冠緇衣の支配を排して民衆本位の社會組織は彼等が理想の對象となつた。海洋に孤立する大英帝國も思潮の徂徠は防ぐ能はず、理想主義の革新論は此處に若干の鬪士を見出したが、就中其論旨の奇矯と論調の熱烈とを以て最も時人の意向に投じたのがゴドヰンであつた。

Hazlittに從へば、ゴドヰンの著名なる「政治的正義に關する研究」程、英國の哲學思想上に深甚なる衝動を與へしものは、現代に其比を見ない。」彼は十八世紀の世紀末を、實に「蒼穹に輝く太陽として赫灼たる聲望裡」に生きたのである。「彼れの如く衆口に膾炙せられし者なく、彼れの如く滿目に仰瞻せられし者なく、彼れの如く一世に追慕せられし者なく、苟くも自由、眞理、正義の論ぜらるゝ所、彼れの名の唇頭に上らぬ事は無かつた」と云はれてゐる（H. N. Brailsford: Shelly, Godwin, and Their Circle, p. 78 に引用）。然るに一七九八年マルサスが「人口論」を提起するに方つて、虹霓の如きゴドヰンの理想論は、陰鬱なる實證論の爲に倏然雲烟の彼方に掩蔽せられたのである。蓋しゴドヰンが人類の理性を過重視して、新社會の建設を翹望するに對し、マルサスは人類の性欲を過重視して、舊社會の保全を勸奬し、兩者共に兩極端に逸するの缺陷を具備するに拘らず、前者の空想的推理に反して、後者の實證的攻究は將に上下に奔騰せんとする社會主義思想の狂瀾を能く既倒に回すを得たのである。此相背馳する兩思想の對峙並に消長に依つて、始めて人口法則は社會問題上のアルファたりオメガたるを認識せらるゝに至りしものである。マルサスが多くの先蹤を贖うして、人口法則の呈示者たる名を占有し得たる所以は、爰に存するものと云ふを憚らぬ。

最後に右と關聯して、マルサスの「人口論」は其極端なる性惡說の爲に、アダムスミスの提唱せる個人主義經濟學の色調を、積極的より消極的に、樂觀的より悲觀的に、推移せしめた事を看過してはならぬ。スミスの人性觀は頗る複雜ではあるが、尠く共經濟學に關する範圍に於ては利己即ち性惡說に立論の基調を置き、然も其利己心の自由發動は、他の同情、正義等の屬性の自動調節と相俟つて、自然に積極的に公共の利益を增進す可しと信じたのであるから、甚だ樂觀的なる個人主義に終つてゐる。然るにマルサスに於ては啻に利己心のみならず性欲を誇張する所の極端なる性惡說を把持する結果、何れは免れ難き罪惡貧窮を可及的僅少ならしめる意味に於て、個人主義を擁護するものであるから、

其所說の著しく消極的悲觀的なるは否むを得ない。而して此傾向がリカアドに依つて他の經濟理論と連結せらるゝに及び、遂に個人主義經濟學は「陰鬱なる科學」の嗤笑を蒙り、其始祖の意と甚だしく乖離するに至つたのである。是れ獨創に乏しきに拘らずマルサスの「人口論」をして經濟學說史上樞要の地位を占據せしめし一因と看る可きである。

然もスミスとマルサスの間には、人類の完全性を確信する極端なる樂觀論者ゴドヰンの介在するを忘却してはならぬ。Bonar は云ふ「或る意味に於て「人口論」はゴドヰンに始まりゴドヰンに終る。何となれば、それは人類の完全性の問題に終始してゐるからである」と（James Bonar: Malthus and His Work. p. 355）。それ故に私はマルサスの思想の淵源を探求するよりも、寧ろゴドヰンの思想を檢討し、兩者を比較對照する所に重要なる意義を見出すものである。而して一方に「生めよ繁殖よ」の神意に驅られつゝ、他方に地上に天國を招徠せんとする一切の社會運動は、畢竟文字を水に描くの迂愚に類する乎。之を幽昏神秘の世界より現實活社會の問題に引降して直視する時は、什麼の歸結に到達するかは、「人口論」批判の章に論及するであらう。

二

凡そ社會改造の提唱には三個の條件を必要とする。第一は現實社會に存する缺陷の檢討である。第二は理想社會に於る秩序組織の表明である。第三は現實より理想に躍進する手段の呈示である。而してゴドヰンは第一の點に於ては、一切の禍根を制度の罪に歸してゐる。第二の點に於ては、無政府共產主義を以て理想の極致とする。最後に第三の點に於ては、純然たる精神改造に論終始するものである。

如上の思想は一七九三年一月「政治的正義並に其一般の德性及び幸福に及ぼす影響の研究」An Enquiry Concerning Political Justice, and its Influence on General Virtue and Happiness なる題下に公表せる書中に演述せられてゐる。

彼はロックの tabula rasa の認識に出發する。以爲らく、「人間は本來固有の法則を脊負つて現世に生れ出るものではない。隨つて生れながらの人間は性善でも無く、又性惡でも無い。」人間の德性は專ら環境體驗に依つて、偶然に左右せられ決定せられるのである（Godwin Political Justice. 1st ed. vol. 1. pp. 12-18）。

惡の淵源は過誤である。「一切の罪惡は過失誤謬が實生活に立入つて、人間行爲の準則となれる爲に發現する。」然し是のみにては深く憂ふるに足りない。何となれば「過誤は不斷に其過誤たる事を、曝露する方向に進むものである。罪惡行爲が有害なる結果を包含することは、直に發見せられる。隨つて不正は本來繼續性を持たない。唯政府が人間の過誤に、實在と恆久性とを賦與するのである」故に過誤は忍ぶ可く、政府は堪へ難い。（pp. 30-31）

彼は爰に章を改めて「社會に現存する最も顯著なる罪惡の沿革を攻究し、其宿弊の政治的制度に因由する所以」を闡明せんと試る。曰く「各國內政上の二大弊竇は、强奪並に詐取であつて兩者共に不正當なる富の移轉に外ならぬ。是は三個の原因より發生する。

第一は貧富の懸隔である。文明諸國の富の不平等は洵に驚異に價する。住民の大多數は生活の保證たる資料を剝奪せられ、彼等の最大限の勤勞が辛うじて彼等の生命を支持する有樣である。貧窮に對する斯かる不斷の苦鬪は、受難者

の多數を自棄に導かねば欲まぬ。壓迫の苦痛それ自身が之を克服す可き氣力を阻喪する。富者の冷酷なる優越振りは、必然彼等を報恢の標的たらしめる。貧者は社會の狀態を戰鬪の狀態と看做し、それは各人の權利を擁護し生活資料を保證する爲でなく、却て總ての利益を僅少の偏愛せられし人々に壟斷せしめ、爾餘の輩には缺乏、隷屬並に慘禍を保留する爲の不正なる結合と思惟するに至るのである」(pp. 32-33)

第二に社會の平和を攪亂する原因は巨富に伴ふ奢侈、虛飾、及び魅惑である。一體人間は艱難が爾餘の儕輩の間にも公平に享受せらるゝ場合には、自己も亦完爾として是に當面し得る資性を具有する。又假令他人の懶惰、安逸を視るも、それが自己以上の利益を他人に齎さぬ限り別段侮辱を感じない。然し嫌應無く他人の特權を見せ付けられ、自己が自己及び家族の爲に最低級の物質的安慰を得可く、不斷に然も徒爾に努力せるに拘らず、他人が彼等の勤勞の成果を奪つて酒盛りするのを見ては、彌が上にも不幸を加重せられざるを得ぬ。富者の奢侈、虛飾の誇示は益々貧者の激情を挑發する。然も細民は「此浪費者より些少の施與を請ひ受くる爲には、如何に不撓の努力を必要とするかを熟知する。而して彼等は富裕と幸福とを混同し、錦衣が屢々傷める心を包む事あるを理解し得ない」(pp. 34-35)

第三に貧窮と不滿を連結する禍因は富者の倨傲と簒奪である。貧者が若し哲人的恬淡を體得して、人間の眞に矜持するに足るものを所有する點に於ては、自己も亦其富める隣人に敢て讓らぬ所以を自覺するならば、他を羨望する惧れはないが、然し其隣人がさうする事を許さぬ。其財產が觀者の心緒を焦慮せしめぬ以上は決して滿足する氣色がない。此尊大なる心が彼れを驅つて、壓迫と不正を爲さしめる。多數の國家に於て、法官が裏面の哀願運動に依り左右さるゝは公然の秘密で、最も位階高き者、最も顯要の緣故を有する者が、孤獨無援の者に勝訴を得るは殆ど例外無き事實である。かゝる破廉恥の風習無き國家と雖も法官は往々高價なる買收の對象となり、最も財囊の豐富なる者が訴訟に勝つ事が多い。既に此事實の存する以上、富者が貧者を酷遇するに方つて殆ど何等の障礙を見ず威壓的、獨裁的、暴君的氣質となるは想像に難くない。其上此間接的壓迫のみが、彼れの專斷主義を滿足せしむる所以ではない。總てかゝる國家に於ては富者は直接間接に立法者である。」隨つて常に壓迫に都合好き法規を作成する。其の結果遂には「朴直、善德、悟性、沮勉は無益である。富が萬能であるとの思想を胚胎する」(pp. 35-37)

以上が現存各種の政府の下に、各種の程度に於て、人類を驅つて相互に、或は公然と或は陰密に、財產の侵蝕を行ふに至らしむる原因である。然らば政治的制度は如何に這般の害惡を助長する乎。彼は更に之を三方面より觀察する。

三

第一に法律は何れの國家に於ても富者に寛大に、貧者に苛酷である。「例へば英國に於て現在地租は一世紀以前に比し減收であるのに、消費稅は同一期間に莫大なる增收を見た。是れ其效果は姑く措き、富者より貧者に負擔を轉嫁せんとする試であつて、是が立法精神の發露なのである。同一の原理から偸盜其他富者階級の陷る惧れなき犯罪は重大犯として最も苛酷なる、時として最も非人道的なる刑罰を賦課せられる。富者は偏頗壓制的成文法の施行に依つて團結に

利便を與へられる。獨占權、特許權はこれを購ひ得る人々に濫りに賦與せられる。一方勞銀決定の爲にする貧者の結合を阻止するには、最も周倒なる政策を採用し、勞働の場面を撰擇す可き思慮と判斷を奪ひ去るのである」(pp. 37-38)

第二に法の運用も亦法の精神に讓らず不正である。革命以前の佛國政府に於ては裁判官の官職は賣買の具に供せられ、一半は公然の價格を以て帝王に獻納し、一半は秘密の進物として宰相に支拂はれた。繫爭人に取つて法官は個人的哀願運動の標的となり、有力なる知己、美貌の婦人、若しくは適當の進物は有利なる論證よりも一層價値ある條文であつた。」英國に於ては、特に財産に關する訴訟沙汰に至つては、今尙裁判を不用とする程法の運用に不正がある (pp. 38-39)。

第三に政治的制度に常に伴ふ地位の不平等は、富の想像上の優越を高める重要なる原因である。太古東方の諸王國及び現在の土耳古に於ては、顯要の地位は常に默示の畏敬を享受し、太守を見る事猶神の如くであつたが、是と同樣の思想は封建時代を經由して尙現代に殘存してゐる。是が爲に貧者は常に蔑視せられ、嫉妬、怨恨、自棄の激情より解放せられる暇が無い (pp. 39-40)。

以上は現存社會の缺陷に對するゴドヰンの批判の概要であつて、其政治的制度に對する熾烈なる呪詛は、一切諸惡を個人の本能性に出づると爲すマルサスの所說と對峙するものである。而して斯の如き思想が窮極無政府主義に歸着す可きは、何人も豫期する所である。併乍爰に一の疑惑が介在する。そは曾に彼れが卒直に無政府主義者たる旨を明言せざる而已ならず、却て Stephen の摘發するが如く「彼は、言葉の上では、無政府主義は害惡であると云ひ、更に滋々乍ら、そは政府そのものよりも一層有害であるとさへ認めてゐる。又最後に、之を常人の見解よりすれば、政府の法律、組織を全廢したる理想的狀態と無政府との間には什麼の杆格を存するか到底推知に苦しむに拘らず、彼は無政府を排斥する爲には實に可及的最大の高壓手段を採用す可きものと斷定してゐるのである」(Leslie Stephen: English Thought in the Eighteenth Century. vol. II. p. 275.)

それ故に Kropotkin が「余は屢々無政府主義の父なる故を以て譴責せられたが、此の榮譽は余に相當しない。不朽の人 Proudhon こそ無政府主義の父である。彼は一八四八年に之を演述せり」と云ひ、Plechanoff が其誤謬を指摘して、Proudhon の「財産とは何ぞや、或は權利及び政治の原理に關する研究」Qu'est-ce que le Propriété, ou Recherches sur le Principe du droit et du Gouvernement" は夙に一八四〇年其初版を上梓したが、そは無政府主義を表示する事極めて輕微に止まり、眞に彼れが之を提唱し始めたのは一八四八年である。然るに是に先立つて一八四五年既に Max Stirner が其著「個人と其財産」"Der Einzige und sein Eigentum" に於て同主義を發表してゐる。「故に Stirner こそ眞正の意義に於て、無政府主義の父たる稱呼に價するものである。其「不朽」なるや否やは知らず、最初に其學理を演述せるは彼れである」と主張し、而して兩者共に一七九三年に出現せるゴドヰンの「政治的正義」を無視してゐるのは一應首肯の出來ぬ事柄ではない (George Plechanoff: Anarchism and Socialism. Kerr's ed. pp. 38-39)。

然らばゴドヰンは如何なる政體を以て最善と

思料する乎。此點に於て彼は論調の壯烈なるに似ず論旨に不徹底の遺憾がある。曰く「眞理は單一普偏である。」そは國境を越え、若しくは時の推移に依つて動搖す可きものではない。隨つて自然の事理に妥ふ最善の政體は一である。或は文化の程度、國民の性情に依つて政府の形態を異にするを適當と爲す論者あれ共、是れ本末を轉倒せる謬見である。國民性が政體を左右するにあらず、政體が國民性を決定するのである。「而して政府は最善の形態に於ても尙害惡なるが故に、人類社會の一般の平和の許す限り、極力之を排除しなければならぬ」と（Godwin: Op. Cit. 1st. ed. vol. I, pp. 167-170）。

即ち其結論は抽象に走り明瞭を缺いでゐる。一方に於て無政府主義を宣言せざると共に、他方に於て是に代位す可き次善の政體をも提示してゐない。此點に於て彼は政府干涉を忌避し乍ら尙其存在の意義を認容せるアダムスミスと步調を共にせざるは勿論、無政府共產主義を理想の極致とし乍ら餘儀なくギルド社會主義に走つたラッセルとも亦其趣を異にしてゐる。

思ふにこは二個の事由に起因するものと私は推測する。一は彼れが其序文に說くが如き言論に對する官權の峻嚴なる取締が、彼れの眞意に反して、幾分論旨を緩和せしめた點があるであらう。他は後節に示す如く、其實行手段の上に歷然現はれたる微溫的傾向が、「眞理は全幅を開陳せよ、革命は徐々に遂行せよ」との彼れ自らの主義に反して、此場合にも累を及ぼせる結果であらう。

然も辭令上の不分明は姑く措き、最善の政府をも尙害惡と斷定し、一切の法制徹廢を高調する論旨に徵する時は、其本然の希求は無政府主義であつた、假に然らずとするも其論旨を徹底的に追求する時は必然無政府主義に歸着するものと解するは至當である。それ故に私は「無政府主義的社會哲學は、三人の有名なる代表者を指定する、英人ヰリアム・ゴドヰン、佛人ピエール・ヨセフ・プルウドン、及び獨人マックス・ステイルネルが是である。就中、學理的無政府主義の最初の樹立者はゴドヰンである」と爲す Diehl の所說に聽從するものである。（Karl Diehl: Sozialismus, Kommunismus, und Anarchismus. 5 Auf. S. 80）。

四

乍併、政府の忌避は社會の忌避を意味しない。ゴドヰン以爲らく、社會の觀念と政府の觀念とを嚴密に區別するは最も必要のことである。「人類は最初相互扶助の目的を以て結合したのである。彼等は社會の成員の相互間に於る、又は其全體に對する行爲を整調する爲に、拘束の必要を生じやうとは豫見しなかつた。拘束の必要は全く少數の成員の過誤及び邪曲より發生せるものである」と。彼は爰に於て Thomas Paine を援用し「社會と政府は其本質を異にし、其起源を異にする。社會は人類の欲望に依つて造られ、政府は人類の邪惡に依つて造られた。社會は如何なる狀態に於ても幸慶であるが、政府は其最善の狀態に於ても必要の害惡に外ならぬ」との所論に讚同してゐる。（Godwin: Op. Cit. 1st. ed. vol. I. p. 74）。

既に政府を廢滅するも尙社會の存する以上は一定の處世上の準則を必要とする。政治的正義の不用なる世界に於ても、尙社會的正義が無くてはならぬ筈である。而して、ゴドヰンは何れの意味に於ても明に功利主義哲學、則ち最大多數の最大幸福を以て道德の理想、善惡の基準と看做す倫理觀に立脚してゐる。

彼に從へば「正義は本來、個人と個人との接觸より發源せし行爲の準則である。是に對しては、「汝の隣人を愛する事、猶汝等自身の如くなる可し」との、理解し易き格言が與へられてゐる。然し此格言は通俗的原理としては顯著なる功績を有するも、嚴正緻密なる哲理より成れるものでは無い。漫然たる一般見解に從へば、余と余の隣人とは共に人間である。隨つて、同等に尊重せらる可きものである。然し實際に於ては、兩者の何れかゞ他よりも一層重要の價値を有する事が多い。例へば僧正は僕婢より尊く、若し其僧院が炎上して何れか一名の生命のみ救護し得るものとせば、誰しも其何れを擇ぶ可きかに躊躇しないであらう。」乍併、尙他に別個の撰擇標準がある。何に故ならば、「吾人は單に一二の人間と交渉を保つにあらず、社會、國民、否、或る意味に於ては全人類と關係を有するからである。隨つて前例に於て最も一般の幸福に裨益する所の生命が救助せらる可きである」（pp. 76-77）。

此道理は富の所有に關しても同斷である。「若し吾人が、其勤勞の成果にせよ、或は遺產の相續にせよ、他よりも巨額の財產を所有する權利ありと假定せんか、正義は此財產を信託と看做す可き義務を賦課し、且つ如何に運用せば最も能く一般の自由、知識、善德を增進するを得るかを愼重に考慮す可き事を命令する。吾人の人格も同樣に全人類の爲の信託である。其才能、悟性、力量及び時間を最大量の一般的幸福を生產する爲に用ひねばならぬ義務がある」（pp. 82-83）。

正義は、彼は更に云ふ、相互的のものである。「若し吾人が利便を授與するのが正當であるならば、他人が之を收受するのも正當である。若し他人の收受す可きものを吾人が拒否するならば、彼れが不滿を訴ふるは當然である。吾人の給付し得る十磅の金を隣人は缺乏してゐる。此場合吾人より隣人へ財產の移轉を行はしめる政府の法律は無い。然し簡明なる正義の眼には、其金が一層有益に運用せらるゝ事を證明せぬ限り、恰も彼れが吾人の借用證書を所持するか、或は該金額に相當する財貨を吾人に提供したると同樣に、彼れの苦情は正當である」（p. 38）。

彼は其著の後版に於て、如說の論旨を一層明確に要約してゐる。曰く「人間の他人に對する行爲の眞の標準は正義である。正義とは最大多量の快樂或は幸福の生產を、それ自身の目的とする一の原理である。正義は吾人に要求するに自己を偏愛するが如き一切の邪念を拋擲し、自己を人事に關する公平なる傍觀者の地位に置く事を以てする。正義は至高の普遍性、妥當性を有する準則であつて、凡そ人類の幸福に影響を及ぼす總ての事件の處理に關し、特定の樣式を指示するものである」（Godwin: Op. Cit. 3rd ed. vol. I. P. XXV）。

抑々功利主義哲學に整然たる理論的體系を賦與したのは一七八九年の上梓に係るジェレミー・ベンサムの「道德及び立法原理序論」"Introduction to the Principles of Morals and Legislation" であつてリカルドウに及び正統派經濟學と緊密なる提携をなし、恰も一條の糾へる繩の如く相互に纏綿して遂に勢の極まる所、例へば William Tompson に見るが如く果然社會主義思想を胚胎するに至るのである。然も一株の躑躅が紅白の花を開くの奇觀は、既に述べたる如くマルサスとゴドヰンの對照に於て示されてゐる。如何となれば兩者共に功利主義哲學に立脚するに拘らず、前者は生存權を否認して

私有財産制度を擁護し、後者は生存權を高唱して共産主義を謳歌するからである。

五

ゴドヰンは財の分配原理を三態に區別する。

「第一の、又最も簡明なる形態は、其物の效用が、他人に依つて占有せらるゝよりも自己に歸屬する時、一層多量の便益或は快樂を生ずるが如き場合に、吾人は其物の上に恆久的權利を有すとの原理である。」其吾人が如何なる方法に依つて之を所有するに至つたかは全く問ふ所でない。唯一の必須條件は其物が吾人に取りて特に必要なる事、並に一般社會が默示の間に之を認容する事である。苟くも其物の使用が吾人に取り眞に必要なる時は、誰にもあれ、又如何なる程度にもあれ、其物に對する吾人の使用權を侵害するが如きは不正である。

第二の私有樣式は、「それが自己の勤勞の所産なる以上、假令其物の使用を壟斷す可きにあらざる部分に對しても、」尙所有權を認容する原理である。換言すれば勞働全收權に基く分配の形態である。

第三は現存諸國の隨所に普及せる私有財産の制度である。即ち「他人の勞働の成果の上にも尙處分權を與ふるものである。」(Godwin: Op. Cit. 3rd ed. vol. II. pp. 432-435)。

今ゴドヰンが以上の何れを最善の分配形態と看做したかと云ふに、そは明に第一の原理に基くそれである。彼は第三の不勞所得を擯斥するは勿論、第二の勞働全收權說にも滿足しない。以爲らく此說を許容せば「若し吾人が勤勞家なる時は、自己の衣食し得る限度よりも百層倍の衣食を所有するに至るであらう。正義は何處に看取す可きや。殊に吾人の過剩財に依つて至上の利便を享受す可き者多數存するに拘らず、缺之を感ぜざる自己が之を收得するは慈惠者の採る可き事であらう乎。此過剩財に依つて吾人の購ひ得る所のものは虛榮嫉妬か、或は寬大てふ美名の下に、實は合理上要求權ある人々に之を返却する事か、然らずんば偏見、過誤及び惡德に過ぎない。」と(Godwin: Op. cit., 1st. ed. vol. II. p. 330)。約言すれば勞働全收權說は如何に緊切に一財を所要する者あるも、それが彼れの勞働の所産ならざる限り、其利用を拒否するを以て不自然である又失當であると云ふのである。

畢竟ゴドヰンに從へば「人類の福利に貢獻し能ふ物質が、何人の所有に屬す可きかを決定する標準は唯一しか有り得ない。正義が是である。」正義は無私の見地より最大量の社會的幸福を産出する事を命令する。而して財の分配問題の關與する範圍に於ては、最も緊切なる欲望を充足せしめる事が此命に妥ふ所以である。故に「例へば一塊の麵麭は何人に歸屬するを正當とする乎。曰くそは最も之を必要とする者、即ち其所有に依つて最大の福利を享受する者に歸屬す可きである。假に吾人が爰に百塊の麵麭を所有する際、巷には飢餓の爲に將に死に瀕せんとする貧民ありて、彼れに取りては一塊の麵麭が其生命を繫ぐ所以であるとせよ。此場合吾人が所有の一塊の麵麭を彼に分讓せざるは不正では無い乎。蓋し一方に適當の支給を受けぬ一人が存するに拘らず、他の一人が過分の所有を獨占するが如きは、正義にして何等かの意義を有する限り、是れ以上の不正は有り得ない。」

彼は更に論步を進めて云ふ「正義の要求する所は獨り此處に停まらぬ。各個人は全體に對する供給量の充分なる限り、啻に生存の資料のみならず、又幸福に生存する爲の資料をも給與せらる可きものである。一人は其生命又は健康を

損傷するまでに勞働するに拘らず、他の一人が奢侈品を充滿するが如きは不正である。又一人は其理性力を開發す可き餘裕を剝奪せらるゝに拘らず、他の一人は共同の資料を增加する爲に一臂の力をも貢獻せざるは不正である。正義は何人にも、若し彼れが公共の爲に一層有益なる方面に獻身せざる限り、各自が其一部を消費する所の共同收穫の耕作に協力する事を命令する。洵に斯かる相互主義こそ正義の眞の本質である」と(Godwin: Op. cit., 1st ed. vol. II. pp. 325-326)。

今、如說の所論が生存權並に幸福追求權を主張し、共產主義を庶幾するものなるは云ふを俟たぬ。斯くてゴドヰンは自由の極致たる無政府主義と、平等の極致たる共產主義とが相融合する所に理想の絕對境を見出すものである。其融合の可能性及び持續性に關する論議は姑く措く、之を不可抗的害惡を可及的輕減する手段として、或は道德的抑制てふ窮策を奬勵する手段として、現存の社會組織を相對的の善と看做すマルサスの所說と比較する時は、其明瞭の著しき、一は時流に投じ一は往々罵言を蒙れる所以を首肯する事が出來る。

私は先に改造提唱の要件として列擧したる三條の中、第一則ち現存缺陷の批判、第二則ち理想境の態樣に關するゴドヰンの思想の觀照を了つた。次は第三則ち現實の此岸より理想の彼岸に躍進する手段に就いての省察である。

六

ゴドヰンは現實社會の滔々たる害惡に顰蹙與歎するに反し、改造の前途に對しては極端に樂觀的なる期待を抱懷する。是れ彼れが人類の完全性及び其平等性を確信する爲である。以爲らく「人類の特徵は其完全性より著しきは無い。そは尠くとも現在人類をして優然卓越せしむる所以であり、又精神科學の各部門に於て重大なる要素となるものである。」人類が其最初の知識の要因たる言語と文字を發明して以來、如何に驚嘆に價する進步を經たるかは歷史の雄辯に證明する所である。「過去に於て人類の遂行せる偉業を追想する時、何人か未來に成就す可き改善に關し强き豫覺を感ぜぬ者があらう乎。進步の餘地なき科學無く、向上の餘地なき藝術も無い。然らば何に故獨り人類道德の向上、社會制度の進步に就きて同じ斷定の下せぬ事があらう。其可能を信ずる觀念そのものが既に吾人の勇氣を鞭韃する。願はくは人類の經驗に依つて利する爲に回顧せよ。是れが爲に前人の慧智は將來に進步の餘地を殘さぬ程偉大であつたと思惟してはならぬ」と(Godwin: Op. Cit., 1st ed. vol. I. pp. 41-48)。

或は人類の不平等を天賦に出づるものとして改造途上の一大障礙と看做す論者あるも、ゴドヰンは是と憂惧を共にしない。彼に從へば「人類は肉體的にも精神的にも平等性を具有する。」反對論者は云ふ「人類の中、全然均等の二人は有り得ない。必ず强弱賢愚の差別が存在する。現世の各種の不平等は畢竟爰に淵源し、强者は征服力を有し、弱者は援助を希求する。隨つて地位の平等を云ふも結局一の幻想に過ぎぬ」と。然し次の省察が之を反駁する。第一に如說の不平等は原始に遡れば現在よりも遙に輕微であつた。未開時代に於ては人類は病患、虛弱、及び豪奢等を殆ど知らず、隨つて各自の力量は甚だ近似してゐる。此時代を離脫せる時に始めて不齊を生じたのである。而して此不齊を輕減するのが將來の改善の目的である。第二に主要なる本質的の平等は現在尙依然として殘存する。單

獨能く數人を臣從せしむる底の力量を保持する者は皆無である。事實國家社會の一階級は權力の爲に臣從せしめらるゝも、然も其權力は元首の個人的權力にあらずして、此元首を奉戴する事を彼等の利益と思惟する他の階級の權力に外ならぬ。第三に道德上の平等も亦是れに讓らない。道德的平等とは百般の事項に單一不變の正義の法則を施して悖らぬ謂である。正義は快樂苦痛を知覺する一切の人々に關與する。而して快樂を希求し苦痛を嫌忌するは、是等の人々に共通の事實である。」隨つて人類は道德上にも平等性を具備してゐると云ふのである（pp. 97-100）。

這個の人性樂觀に改造可能の確信を得て、ゴドヰンは一切の急激手段を排除し漸進的に圓滑裡に之を實現せん事を主張する。曰く「政治的制度に招致す可き改革の程度並に時期は、各國に於る知識の發達、及び其改革に對する準備如何に依つて決定せらる可きものである」（p. 172）「故に人類の更生を希求する人士は二個の原理を心得ねばならぬ。一は常時眞理の發見及び宣傳に腐心する事、他は自己の所論を實現す可く世人を說伏し得るまでの、時の經過を快く陰忍する事である」（p. 187）。「暴力は政治的徒黨の爲す所で、簡明なる正義の論據に訴ふる者には適しない。望ましき完全なる改革は、即刻の改革にあらず將來の改革である。然し、そは往々誤解を招くが如く、革命の時期が無限の彼方にあるを意味しない。偉大なる變化が突如勃發し、偉大なる發見が不意に現前するは人事の常である。宜しく小國民の精神を薰育せよ。そは假令暫らく徒爾に見ゆるも、其效果は豫期せぬ時に示現するであらう。眞理の王國は絢爛なる前觸れ無しに到來するものである」（p. 205）、而して其眞理の王國に於ては、「狷狢なる利己の法則は消滅し、何人も其微少の蓄財を守護する要なく、又間斷なき缺乏に憂慮し懊惱する要なき故に、各自自我を滅却して、只管公共の福趾を思念するであらう。爭鬪の因絕無なれば何人も隣人の敵となる事なく、隨つて理性の命ずる仁慈の世界が現前するであらう」を（p. 345）。

思ふに非凡の思想家も尙其時代思潮より完全に蟬脫するの至難なるは、ゴドヰンの精神改造論に於て遺憾なく明示せられてゐる。理想論と云ひ實證論と云ふも、畢竟ロックに濫觴を發する個人主義てふ一河の流れに棹させるものである。それ故に熱烈なる革命兒ゴドヰンも、其實行手段の提示に方つては集團に依賴せず暴力を希求せず、只管個性の啓發に依つて是れが達成を企圖したのである。乍併私はそこに免れ難き矛盾があると思ふ。そは通常批難の標的となれる無政府主義と共產主義との兩立を意味するのでは無い。如何となればゴドヰンは既に無政府共產主義の成立及び存續の必須條件として、是に適應す可き理性、道德等の完全なる發達を前提とするものであるから、一旦かゝる理想的成員のみを一團として庶幾の社會を實現し得たりと假定せば、毫も無政府なるが爲に共產主義が崩潰するが如き危惧は存在しない道理である。故に社會の全員に分配するに足る共同の資料を生產する爲には、各成員が平等に忠實に勞働に服する要あるを以て、之を强制す可き公共の機關、則ち政府が必要であるとの非難は、例へばKropotkin の如き暴力の是認者に對しては慥に頂門の一針たる可きも、之を以てゴドヰンに臨めば毫も痛痒を感せぬのみならず、却て此非難を轉じて其精神改造論を支持する武器に利用せられるであらう。然し私の承服し能はざるは其

精神改造論そのものである。既に述べたる如く彼は一切諸惡の發源を過誤と見るも、之を助長し之を擁護し、人類の理性德性の發達向上を妨遏するのは、偏に現存の制度組織の責と思惟するものである。然るに尙現存制度の羈絆の中にあつて、人性の啓發に全幅の期待を懸けんとするは其本を匡さずして、其末を潔めんと欲するものである。現にゴドキン自らが云ふ「凡ゆる恐怖す可き爭鬪は、富の不平等に起因する。此嫉視、墮落の源泉の殘存する限り、一般の平和を語るは幻想である」(Godwin: Op. Cit., 1st ed. vol. II. p. 346) と。然も彼れ自身の精神改造萬能論は不知不識の間に這個の幻想に陷つてゐる。洵にゴドキンの空想は、人類の完全性に對する信念よりも、現存制度の障礙の中に在りて尙能く此完全性を實現し得可しと信ずる事に於て、一層甚しきものありと云はなくてはならぬ。而してかの人口過增の脅威に對する彼れの辯駁は益々其空想を放縱ならしむる一方、亦頗る含蓄に富める豫言を示してゐる。

七

人口過增の傾向を以て不可抗的禍因と看做すもの、マルサス以前に敢て其文獻に乏しとせざるは既述の通りであるが、就中ゴドキンの駁論を喚起せるは Robert Wallace である。彼は共產主義を以て完全なる統治と斷定し乍ら、然も其結果として生ずる人口過剩の所詮慘禍を招致す可きを云爲し、悲觀的結論より脫離するを得なかつた。以爲らく「完全なる統治の下に於ては家族維持の上に生ずる不如意は悉皆剔除せられ、子女の扶養に遺憾なく、萬事人口增殖に幸す可きを以て、假令或る季節又は或る特殊の氣候に於て怖る可き疫癘の爲彫多の人命を毀損する事あるも、尙人口は續々增殖し、遂には全地球が人口過剩の爲到底之を支持する能はざるに至るであらう。又假に哲學者が生物體を食糧なしに支持する方法を案出するとせば、同時に人類も亦不死の狀態に置かれねばならぬ。然るに土地の沃度には限界あり、又其廣袤も從來の知識の關する限り常に一定し、太陽系に重大の變化なき限り之を變更する事不能である。隨つて完全なる統治の下に增大する人口を、悉皆支持する事は出來ない。かくて人口は遂に地球に橫溢し、かの空想的計劃の熱心なる讃美者等は、畢竟それが地球の限界と相容れざる爲に失敗に終る可き最後の日あるを覺悟しなければならぬ。力と武器とは結局人類の爭鬪を決定し、敗慘者の死が生存者に充分の食糧を與へ又生れ來る者に其餘地を與ふるであらう」と (Wallace: Various Prospects of Mankind, Nature, and Providence. 1761. pp. 114-119)。

然らばゴドキンは如何なる論據に立ちて如上の陰翳を拂拭せんとする乎。曰く、Wallace の推論そのものが「人口過剩の難關は甚だ遙遠の將來に存する事を豫見してゐる。人類の棲息し得る土地の四分の一は今尙處女地であつて、既墾地と雖亦無限の改良を施す事が出來る。爾今幾萬世紀の人口增殖を經過して、尙且つ地球は其住民を支持するに堪へるであらう。然く長期の間には太陽系の事變の爲に地球そのものゝ破滅すら勃發せぬとは限らない。且つ又然く遙遠の障礙に對しては、今日吾人の豫想するを得ざる何等かの救濟手段が提示せられるかも測り難い。然るにかゝる遙遠の將來を危惧する爲に、現在人類の本質的利益を齎さんとする企劃を敢て回避するは洵に不合理の極みである。」況や Franklin は「精神は何日か物質を支配す可し」と云つてゐる。然らば何ぞ精神が吾人の肉體を支

配し得ぬ事があらう。換言すれば吾人は個性の發達に依て不死の狀態に達する事すら想像が出來る(Godwin: Op. Cit. 1st ed. vol. II. pp. 392-393)。かくて「地上により以上の人口を支持する事不可能となれる時代に生存する人々は增殖を中絶するに至るであらう。」蓋し理性に依つて性欲も絶滅す可きが故に增殖の動因が無いからである。「其上彼等は不死となり、社會は悉く成人のみにて兒童は一人をも算せざるに至る可く、世代より世代への相續は滅失し、眞理も亦三十年毎に更改せらるゝ事なく、戰爭犯罪司法政府なく、疾患苦惱憂鬱憤怨なく、各自形容し難き熱意を以て社會全體の福利を探索するに至るであらう」と(p. 402)。

かゝる見解が兩性間の交渉に就ても亦特異の議論を誘導せるは怪しむに足りない。即ちゴドヰンに從へば、理想社會に於ては「結婚制度の廢止は何等の弊害をも隨伴しない。男女の交情はかゝる狀態に於ては凡百の他の種類の交友と毫も相異せぬ。固より吾人が現世に生活する限り、他の人々に比し特に吾人に取りて優れたる價値を有する一個人を發見する事があるであらう。而して此特定人の價値を認識する程度に正比例して親愛の情を增すであらう。こは女性に關して云ふも全く同斷である。吾人が特に一婦人の人格識見に敬服する事深甚なりとせば務めて彼女の親密なる交情を欲求するであらう。勿論他人が吾人同樣に彼女を撰擇す可き場合ある可きも、そは毫も憂ふるを用ゐない。蓋し吾人は總て彼女との會話を享樂し得可く、又吾人は總て賢明なるの故に性的交渉を以て極めて一些事に過ぎずと思惟するからである。理性を具備する者の飲食するのは快樂を貪るが爲にあらずして、飲食は吾人の健全なる生存に不可缺のものであるからである。同樣に理性を具備する者の子孫を增殖するも、そは官能的快樂追求の結果では無くて只種の繁殖そのものが公正の事たるを以てである。隨つて其行爲は自ら理性並に義務の命令に依つて制限せられるであらう。かゝる社會に於ては各兒童の父は何人なるかを判別し得るか否かは正確に斷言し得ないが、只其詮索を必要とせざるに至る可きは敢て明言するを憚らない」と云ふのである (Godwin: Op. Cit., 3rd ed. vol. II. pp. 851-852)。

今マルサスは如說の所論を何等學理的根據に憑依せざる空論として擯斥するのであるが、又事實到底許容し難い極端なる空想に走つてはゐるが、然し私は尙無碍に廢棄するを得ざる力强き豫言を包含するものと信ずるのである。如何となれば產業革命以後の駸々たる經濟事情の發展は、一旦は其影を沒せるゴドヰンの理想主義を二十世紀の現代に召還して、更に一層熾烈なる勢威を以て再現するに至つたのである。Karl Kautsky が社會主義的社會に於ては爾今一世紀を閱するも尙人口過剩の憂慎無しと斷言するが如きは遙遠の難關に對しては未知の救濟手段を豫期し得可しと云へるゴドヰンの樂觀論を事實の上に立證するものではない乎。更に又 Herbert Spencer が人類の發達は其生殖力を減退し出產率を低下す可しと推論するは、長年月の間には如何なる變化の勃發するや測り難しと云へるゴドヰンの所言を生物學の上に裏書するものでは無い乎。是等の消息は尙「人口論」批判の件りに於て再論する。唯爰に一言す可きは如說の思想が獨りゴドヰンに特異のもので無かつた事である。私は次に彼れの政治的正義に後るゝ事一年、佛蘭西に表はれたコンドルセー Marquis de Condorcet 1743-1786 の「人心の進步に關する

史的考察」"Esquisse d'un Tableau Historique des Progrès de l'Esprit humain" を瞥見したいと思ふ。

八

彼は歴史を十期に區分する。（一）漁獵時代。（二）牧蓄時代。（三）農耕時代。（四）希臘に於る商業、科學、及び哲學の全盛時代。（五）歴山大王遠征以降羅馬帝國衰亡に至る科學及び哲學の時代。（六）十字軍に至るまでの科學頽廢時代。（七）爾後印刷術發見に至るまでの時代。（八）爾後 Luther, Decart, Bacon 等に依る法王權攻擊に及ぶ時代。（九）Decart 以降理性（リーズン）、寛恕（トレランス）並に人道（ヒューマニティ）が民衆の標語たらんとする佛蘭西共和國に至る時代。及び（十）將來の時代が是である。

而して彼は其分類の第九期に至るまでの過去の歴史を支配せる法則は、亦當然第十期則ち將來の歴史をも支配す可しと前提し、次に過去の歴史に於る最も顯著なる三傾向として、第一國民間の不平等の撤回、第二階級間の不平等の撤回、第三個性の改善の三項を擧げ、かゝる傾向の必然的歸趨として將來に於る人類は、智的に道德的に、將た亦肉體的に、向上進歩し人性の完全性を遺憾無く發揮す可しと結論する。曰く「人類の進歩は如何なる方面に於ても無限である。其の結果物質的享樂の平等及び生活資料の保證を實現し得ると同時に、德性並びに智能の完成、及び政治的自由を招徠することが出來るであらう。產業は科學の援助と相俟つて、土地をして無限の資料を生產するを得しむる程發達するであらう」と。爰に於て彼は暫く論歩を停めて人口の增加も亦無限ならずやとの質疑を提起し、然る後是に應へて云ふ、「兎もあれそは遙かに遠き未來に屬する事である。其時期の到來するまでには吾人は「最早」迷妄より蟬脫し、明白なる、されど現今實施せられざる底の、種々なる方法を採用して人口を制限するを得るに至るであらう。而して文化の進歩の必然齎す可き兩性の平等は、斯かる完成期の到來を容易ならしめるであらう 又醫術の進歩は生命を延長し、死は寧ろ原則よりも例外たるに至るであらう。迫害に惱む哲人は眼を現代より此光輝ある將來に轉じ、以て其の身を慰撫す可きである」と（Bonar: Philosophy and Political Economy. 2nd ed. pp. 204-205）。

如上の論旨をゴドヰンのそれと對比するに、後者が內的精神的發達に重きを置けるに反し、コンドルセイは外的技術的進歩に期待するの小異がある。隨つてマルサスも之を駁擊するに方つてゴドヰンに對しては、肉體が精神に服從す可き兆候は皆無である、哲學者と雖齒痛を忍耐する事は至難である、快活なる精神も弱者の歩みを强者のそれの如く速める事は出來ない。曾に肉體それ自身に古來變化無きのみか、肉體の精神に對する關係に於ても殆ど何等の變化を見ずと云ひ、又コンドルセイに對しては彼は單に、技術は假令壽命を「無定限」indefinite にしても「無限」infinite にはしない。園藝家は石竹を「無定限」に大きくは出來る。何人も石竹の大きくなり得る極致を見たと斷言は出來ぬ。然し石竹は決して玉菜の如く大きくならぬとは斷言出來る。そこに即ち「無定限」と雖限界はある。是と同じく人の壽命も亦年數を以て確定し得ぬにしても、限界を存する事は明であると云つてゐる。（Bonar: Malthus and His Work. p. 23）。

然も過去に於る進歩の歴史に徵して、未來に於る圓滿豐樂の理想境を期待し得可しとなす信念に於てはゴドヰンもコンドルセーも共に一である。內的と外的と、彼等は相異れる軌道を蹈

んで、同一の目標に直進せんとするものである。且つ又兩者の思想が一見先哲 Rousseau のそれに近似して、實は著しく色調を異にする所以も注目に價する。Rousseau も人爲の制度組織を悉皆撤去せん事を主張する。然し彼は人類の平等を得んが爲には人類の進歩を犧牲に供するの要ありと觀た。彼は平等と進歩とは兩立し得ざるものと信じ、且つ平等は、原始蒙昧の時代に逆轉するの犧牲を敢てしても、尙獲得實現す可き價値あるものと思惟したのである。固より私はかゝる思想を輕忽に是非するもので無い。南米 Paraguay に於るエスイタ教徒の共產團體に屬する人々が、其狹隘なる地域に營む粗朴の生活が、現代諸列强に於る文化生活よりも、不幸であるとは何人が斷言出來やう。私達は單なる經濟眼のみより裁斷するの偏執を避けねばならぬ。乍併、假に現代文明の諸要件より之を律する論の一部を成すものである。故に此項のみを分離して觀照の對象とせらるゝは、筆者の本意で無い。

（第一章「政治的正義」と「人口論」
第二章「人口論」の原理と政策
第三章「人口論」の哲學思想
第四章「人口論」批判
トーマス、マルサス論）

此一篇は左に示す如く、逐次發表するトーマス、マルサス

るならば、其幸不幸は姑く措いて、尠くとも退嬰的であるとは云ふ事が出來る。然るにゴドヰン並にコンドルセイに於ては是と趣を異にしてゐる。彼等は社會の全成員が眞に文明化せらるゝ時は、自發的に平等を回復す可きを期待する。換言すれば文明と平等が兩立し融合し得る可能性を信ずるものである。此意味に於て彼等の理想は Rousseau のそれに比し遙に高遠と云ふ可きである。而してマルサスは、此高遠の理想を皐近の現實に即して打破せんと欲するものである。「人口の原理に關する一論附ゴドヰン氏コンドルセイ氏及其他の著作家の思索に關する評論」"An Essay on the Principle of Population, with Remarks on the Speculations of Mr. Godwin, M. Condorcet and Other Writers" とは「人口論」初版の全題名であつたのである。

アリストファーネスの喜劇『エクレシアツーゼ』とプラトーの『ポリタイヤ』との關係

大城戸忠

一

アリストファーネス（紀元前四四八年頃に生る）は悲劇詩人ユーリピデスの人氣が稍々下火になりかけた頃から名聲を得て來た希臘最大の喜劇詩人である。彼は喜劇により、輕妙なユーモアの內に、當時の腐敗せる政治、外交、思想又は著名な人々を激しく攻擊した。彼の著した喜劇は合計五十四の多きに達するが現今迄傳はれるものは僅かに十一に過ぎぬ。その內我等に取りて最も興味のあるものは、「エクレシアツーゼ」（婦人議會）である。この喜劇は當時の政治家の腐敗せること及び當時の共產主義思想を知るに最も便利なのである。先づその大體の梗概を述べて見よう。

（The Comedies of Aristophanes, trans. into Eng. by W. J. Hickie in 'Bohn's Libraries' 及び Théatre d' Aristophane en 'Les meilleurs auteurs classiques, Français et Etrangers' による。尙外に Mitchell, J. H. Frere, Droysen, Voss, Waish, Carey, Wheelwright 氏等の忠實な譯本あり。）

第一幕

最夜中少し過ぎの事、アデンスのとある市民